



門 3909
 號 3909
 卷



昭和十九年
 四月十九日
 蔵

序

ある世の中にありとありとゆるゆると
 物とどろくかどろくか道にの海にあらざるも
 ほれたぬづくまあら先が陸奥のまゆこの紙
 も漆あまも。妙ささちる物もろろあま
 とろいども其始られたものありと。ふんは
 あまども。夏の糸の糸ろ一ちるあま
 乱れをて。を結のつたじと
 かくれて。を始のたしる

雅を序

そり。汀の蘆くどかた集見。欠くも瓜浦ひて。
あましが純を伴つとて。素より客乃る瓜
あつ見。香の枝をさうさう。新勢。淡。た。た。人
のあまごり。と。純と。い。も。取て得。と。ん。人
の。い。に。純。唯。い。も。あ。た。女子。乃。故。と。ん。純。
新。し。と。瓜。と。ん。を。使。と。た。れ。じ。と。さ。よ。の。と。

寛延二年己卯初書

撰江 田中友成の子書

雛あそびの純

度會直方著

あつ乃。神。杖。ゆ。の。年。の。む。し。より。今。に。て。り。て
之。月。の。言。の。毎。よ。い。と。さ。い。か。ど。も。る。勢。杖。い。り
源。を。く。ん。の。信。ら。に。子。早。乃。神。代。の。若。より。傳
も。純。神。杖。あ。つ。瓜。世。と。り。人。の。む。に。た。に。の。と。あ。り
り。て。ゆ。を。神。路。と。の。あ。り。は。林。乃。道。多。て。深
を。に。系。に。え。と。り。し。と。見。の。と。ん。人。と。り。る。れ
は。其。物。の。根。と。人。枯。野。乃。若。葉。小。あ。り。れ。を
下。の。名。海。と。ん。の。求。た。ん。と。も。せ。て。る。と。

雛あそび

つづりに華女のよそあそびものとかかりしそ
ゆらりふもつとまゝにたれやうとせは幸は事
をまてく人探り近く物まわらう人
君の侍れどもさうにまわらう人もさく
せり書もいあさうにあり目乃ほまてく
まあれる好徳の窓乃りしにあり文をむき
え侍れば厚徳を子のむさくはし
冠位十二階を定免は十九年以百友の
免あまよし記侍れどもさ子の推古天皇乃侍

時政中と司とあまし天皇十一年に始
冠位十二階を定免は十九年以百友の
の免冠りあ孤定のあましればさ子の幼
時此事ととらひ免さるし又あましの後
る今の離れ天恩と名付て唐土東王と
免人乃像をばしとらひのにて
書よありとやされ侍れどもさ
かきし日本紀をえら
七年の二月大物主神乃若

養老二年

雅堂上



雅堂上



負とるたり這子のやうに作らるるものと云ふ成る
紀一まつ又光源氏は乃圓須磨乃浦にて被
給ふ時人形を作り舟に乘り流しあまの須磨
乃巻よつとらけけけの人形も這子の類なり
あまの須磨をさしつゝいふ事と云ふとくは後
といて被物ともす也當昔推仁天皇の二十六年
又思ふ神侍皆必百船度倉乃二十餘川の上に
乃法座乃時と云ふ命若くは備靈を作りて
倭姫命に被解をさしつゝ見給ふ事 傳給

そ若易靈はらふと云ふ人形たりと被りとのけ
そ身はあまのりねせ給罷知たりと身あま
神乃不為をい若備へ被解負て海東へ流
捨あまのいづる身もと云ふあまも清く平あ
身と云ふ乃被種たり去によりあまいあ
よりけ又思ふを被物と名付て常け小思け
小そ人なりとあまの物と云ふは乃被種
神を被除しむは神事なり又乃被種
若易と云ふ事と云ふ唐土にて

清とよ川乃上にてきぬ男女あつらひの若衆と
つよ若衆をたてて又難厄難を抜除とる儀式を
て文人の筆を流して詩を作り酒宴をして拵ぶ
あまの曲の宴とつよ女相とて二十四代元宗
天皇の元年二月己日乃後とて花宴へ御
幸侍しまゝ始て曲の宴をさしあまよ
日本紀に云くあり我知いても唐土小て色も
ひうの之月上乃己の日にけ事ありしが唐土
小ての魏の代乃時上の己れ日を止く之月之

日に定めと宋書とつよ書に記作りぬ我回つても
上己乃帝とつ人も今之月之日小つてさ
事とつらう作り拵ればは日女子の勢儀
て拵ぶ事も彼是の合とればある又難と難
除く事なる事終ひるし侍勢乃神よりハ
昔より女子のしを拵ぶ事小に小兼むい
らんとて累女乃人れを作り置はとる衣服と
恙世家臺乃上に拵ぶ事多し又婦ひらは
新しさをちして拵ぶとす作りしにほあて

名めをよみてむいふとらん於名に叶むとて
小僊僊のりそあつふ感於人於るごとく
行つそ平志なれ離さらいさく作るをその
系ハ少老名命の内係をわごど行る系縁も
あり也此神を大己貴命更が下を圓形と思り
出さふ又十狭乃小汀へ入りあふ時海系乃
浪乃上よりらぬとれ胃白飲乃皮をよ
鰐鰐乃羽をまよして形をあらわす神あり
己貴命大己貴命にわちくはむとていひのせて

此いふ人は此いふ人なりと云ふ
命神をよみてあつふと天にのりまよして
を奉て鳥空を産靈命に同結人ハ吾神思ん
又百乃神あり其中に吾指乃るより海陸なる
経らぬとれ神ありと云ふにけ思はるべし
言月そやあふいと神命ありい少老名命
ハ大己貴命と云ふを合せ醫術を物
いそ人そくく乃病難を治ふ
法を定めて了め厄難不祥を治い

雅を上

維
五
二



人を仁徳より清心をまひらるる事よりの事
むらさきもつる淵よりもぬく今乃世もども破
二神のより玉座し方術跡りて淵の事なり
そののり侍るとるを後飲明天皇の時なり
百済必より醫乃博士海より二神の事なり
玉座し方術のりて世にまはるるも
ありしほど中若もども和氣丹波乃支家
いんらんくもを淵を侍人するより一急良
乃此能にほるまらされは能をらんく作

る事よを仁義ととるる小本能乃遠風に
て女産名西神乃産らぬとくまはせぬ
以像をばしなり稚子乃身に人をして抱
りくくの災害を拂い除く神役とるせる神
事乃物なりがあらそふに思ふべき事ありに扱
又婚配乃時貝合とはどくことぬれを
結るる二神代の時貝合非給貝非乃二神
るる事よを神祇扱ひあらるる事ありに
時治行虫貝非は佐宜とらるる事ありに

難色二

けは佐宣とてよふあにりし神を
よめる衣腋を佐宣と名付し
の中乃佐を器し多りし
婚紀乃時貝桶とて心く遠
新事も付貝桶と給貝桶と
あり人乃世とて天兜の
路見仁徳天宮乃時あり
室乃四時又日檢新舞回より七種の寶物を持
ありあは是存豆志八あを神ありを始れ但馬

圓出請に於て女身乃女麻多鳥を妾て
豆志乙姫を産あり仁徳天宮の四時を
を善ふ辰社乃神意まじり人とも
其時に見乃秋山下氷社乃神
彼姫と妻にせんと思ひ衣禪
て宇紀豆政をありし人の後
潤へそり夫をが家乃探ふ
友乃祀と化しれば姫ありし
がそ花嫁らんとして其家に
入あは

惟色上



あそぶ女の教養あれば貴きも穢きも人
乃伴へ嫁しては夫の如くはさむと能く人
へををあるぬ方に引れ我心をまに振る
女乃獄をを忘れれば是に夫よとさめ
捨れておれを悔きどをいさくるはし方
志しく思つてそのよからふなりぬ雛の個
度をとり思ひあるがごとく余情をよめて又
おちる人へ一ねと雛の個度の教くたる中
に大強子といふ物ありきも神代よりみえりて

悪魔を道ちりて災を招きおちるは
火取芥命の身は火を出入りし徳あり
及ぶるまをとりて我子孫のその集人とめて
仕人さんと振るいあは集人ともいふま
常に天皇より文書のかさつて雛れを吹く物
まのしほふまのその也これ狐を於心通の後
に大書云の目ありなり信下禁書に入付集人
も狐拍を徳い舞ありおれを拍吹とりし神
代乃き風也といつては拍吹とるの悪神を吹

雛地上

言遊のまうと遊あつぞ近ちかく於お於お學まなびまちちちちりりゆゆ人ひと今いまもも社やしろのの社やしろ乃なりあ
に拒魔こま大おほををああままももああれれよよりりのの起か起か也なり今いま乃なり
大張おほ子こもも物もの人ひとととりり又また縁えんにによよりり拒魔こま大おほ乃なり於お於お容ゆる
ををししししああ難ひま洞どう度どの中なか小こててもも才さい一いち乃なり物ものととすする
いいるる惡あく魔まをを拂はらいい災わざ害がい災わざ災がい志しりりぞぞくくるる社やしろ代しろの
傳つた人ひとももののああれればばちちりり又また今いまのの世よままぞぞもも小こ兒ごははかかららいい
ああららるるりりああるる時とき物ものののままくくとと唱な傳つたりりもも惡あく魔ま
をを拂はらいいままづづららびび厭いと勝か乃なり法はににてて身み常とこああららぬ
社やしろ祀まつりちちりり又また祇ぎ園えん牛うし頭づ天てん王わう乃なり役やく人ひと大おほ社やしろ人ひと

ととりりももああららるるりり又また今いまのの世よままぞぞもも小こ兒ごははかかららいい
ああららるるりりああるる時とき物ものののままくくとと唱な傳つたりりもも惡あく魔ま
をを拂はらいいままづづららびび厭いと勝か乃なり法はににてて身み常とこああららぬ
社やしろ祀まつりちちりり又また祇ぎ園えん牛うし頭づ天てん王わう乃なり役やく人ひと大おほ社やしろ人ひと

附 七ノ夕しちのゆふのの家いえ乃なり記き

七しちノの夕ゆふのの家いえととりりももああららるるりり又また今いまのの世よままぞぞもも小こ兒ごははかかららいい
ああららるるりりああるる時とき物ものののままくくとと唱な傳つたりりもも惡あく魔ま
をを拂はらいいままづづららびび厭いと勝か乃なり法はににてて身み常とこああららぬ
社やしろ祀まつりちちりり又また祇ぎ園えん牛うし頭づ天てん王わう乃なり役やく人ひと大おほ社やしろ人ひと

離りと

唯
上



埜く橋をりて織女を後にとり又六日た
を天のさよ橋とりと事風葉抄に久作所記
に新垣家集より

重なるあさりさよ橋経まゆと

いさろろろろは七又はめ

七クろろの糸半織女の二軍はとてゆすにて
男七クろろを産屋といひ女七クろろを織姫といふ今ろ
世に果とろあ瓜のろに糸半といふ名に因て半を
糸ろ風情を伝うたれども流に河鼓星といふ



新田生よて糸半にる地なるなり右通く此記を
産土のろと我國小傳へる由されたたるをこと
りる名に神に年久しきそののこ真故の神代巻に
味相る産屋神の妹下照作の致にあもるや
としたあまののろあせおとろ事ろ久作をば
あまあまのろ名に記に神代より有るろ

卷之上 終

雑色二

ふり色にそと千早振神代より傳りて造り
神代より傳りて日本に傳りて人志れぬ日本
と女一物事云々の事乃美事と申に
女子より傳りてあそぶ母ははりふり貝合
もそ東路の神代より傳りて神代より傳りて
ありて今にあそぶを好むのたれはいと女事
いふるに言の出るればたより方たはるかに出
さしもありだ女ゆゑと申さるれつ
貝合の娘を考れば古事記と云はる書に

素戔嗚尊乃神子大己貴命と云はる神代
八上は素戔嗚尊とありて妻にせましくかぎり
の神代乃事八十神孫と云はる神代乃事
ふ事にて傳せんといふりあそびた教さんとい
ふ人は大己貴命と云はる神代乃事と云はる
のわり神皇產者等に云はるるを云はるる人は
討雲貝非蛤貝非といふ二人の神を云はるる
討雲貝非の波佐宮乃依り蛤貝非の小碓井の水
をたて母乃乳にぬりしうばうらうらまはる

貝合本

生あまう一ぬを以も神かみ素す直ち鳥と弓ゆみ乃すなは津つ伴ばいにり
ていむむととめめ須す勢せ非ひとと又また婦ふにに女にああままとと世よに
むむととぶぶのの神かみとと無なきき妹い子こりり奈なととししまま乃乃
始はじめもも蛤かき貝がい非ひのの名なににししりりてて甲かのの貝がいとと拾ひろ
いい貝がい合あととりりのの又また婦ふ和わ合あ乃乃津つ敷しけけりりししりり
起おこもも家かをを京きやうととししるる又また京きやう乃乃天てん宮みや又また十じ二に年ねん
のの冬ふゆ十じ月げつににああががままへへ行ゆ幸ゆきまましし海うみ一ひと上かみ総そう圃ぼ
ししりり安やす房ぼうのの水みづ門かどへへ後のちととああしし時とき大おほ宮みやししりり是こゝろがが是こゝろ
のの鳴なららるるををままををああししままをを乃乃船ふねををいいんんとと

海うみ色いろにに出いてて白しろ蛤かきをを拾ひろいいああしし狐きつね態たい麻あし六む六む局きやう
ととししりり人ひとをを浦うらのの蒲かまをを死してて子こ繼ついでととししりり彼あつち白しろ蛤かき
をを懸かああししてて進すす先まへししりり白しろ蛤かきととししりり今いま此こゝろ蛤かきのの
半なかちちりりああままととししりり日ひのの半なかににてて蛤かき貝がいとと同どう出いてて死し
後のちのの物ものととししりり蟻あまれれ乃乃夜よにに蛤かきのの善よき美みとと月つき四よ
時とき半なか乃乃女に侍しやう乃乃京きやう持もち殿どの乃乃此こゝろ奇きししりり
若わかがが乃乃いいぬぬぐぐりりふふししりり蛤かきとといいんん
ああいいちちたた乃乃そそ我われををいいししりりああ
されさればば京きやう乃乃天てん宮みやのの是こゝろがが是こゝろ乃乃蛤かき拾ひろいい

貝合下

あふりり、我と清后の編日大郎姫八坂入水
の心操正しく、唯和に備へまこと清徳小聖
つるものにて、是賢者の唐土小て、唯鳩と石付
周文王と、戸人の清后大姫と、よのちいふた
賢女にて、後せま人に、主婦徳を待て作りく
罪くく、唯鳩の河の洲、ありと、後、り、る、を
を、唯鳩篇とて、待、経、と、よ、書、に、孔、子、の、徳、を
と、い、え、ま、り、け、ま、の、鳩、時、河、の、洲、に、居、れ、も、流
に、嫁、く、ら、ま、り、ま、せ、ず、可、瓜、瓜、と、て、於、小、事、大

終と、又、婦、別、あり、と、い、く、教、に、か、ま、い、又、日、あ
一度、げ、ま、り、て、い、ま、さ、る、と、也、古、き、り、り
み、さ、ご、め、の、洲、に、ま、り、舟、の、文、一、は、瓜
ま、ん、く、ん、よ、り、も、我、く、ま、は、さ、れ
と、款、に、も、よ、ま、り、又、蛤、の、中、に、有、珠、を、い、ご、く、と
詩、に、も、作、り、ま、ま、瓜、照、屋、珠、と、い、ひ、て、女、を、心、を
治、め、婦、徳、家、を、照、せ、る、小、あ、ご、く、て、後、く、り、の
ち、り、極、又、貝、合、の、世、に、さ、う、ん、小、ち、り、ま、り、の、あ、れ
官、女、の、書、に、ま、り、あ、る、小、の、村、上、又、今、り、清、け、時

貝合下

七

貝合下



源乃其明とや人かう一はに碓礮帝の清子
にあ才学もいづうとせれ多人は康保二年
乃正月に右大臣小佐内四年の十月よた大
臣に轉じあし西交大臣とせうづれ世の人れ
か人もゆく一く時りたあし一が冷泉院の涉
代志らしめと安和二年の三月ある人の徳云
に飛せられ大宰権帥とあてられ紫に流され
あふ時越あ守る時がむとめは云式部とあは
して云式部といひ一がむとあれたより大臣り

かれあく一とせりりれは大方きは情を歎きぬ
大臣不はの事にかりしめ我飛りよして死不
乃月をらんまや平よりあしりよあぬりかれ
とも今交せんともあしはあ身も私に思ひ
いかり終るもあられは我心の苦無と人道
しそあす先神明を明らえんそあり一後よへ
かれと人志が一かうた世の浮雲にさつれ時の
さういらぬをさうらん世日あつしてあはらん
あうらぬあはらんあはらんあはらんあはらん

乃時を待て一書いぬりあはせよとて一にそ
常に秘蔵あり侍勢回二ん浦よりほまじ海
蛤身白とつ又大蛤一ををれあ一陰貝の片を
我方小と先陽貝の片を式アにまつりたり其
比一も大御院選子内親王より上東門院一東院へ一東院清
息もて是れ日のほれくわさぬてさめり
あり茶紙やけりしやを結ひりるに女院式
紙紙をあつたをさうまうとて人ごとく修とせれ合せ
られは式紙がやりのりほくきおのりたり

づこころが竹たからるが岩屋住者まど六目馴
まればめほしきま一わじしく修りあて
あしせあしししやられが思ひましく
とも他れと修とせまれば源氏物語又十日蛤
作りてよりる身之の美は巻を結とせにまれ
て親とせまゝなるゆ人友式紙の名をあつたためて
紫式紙とめされありさうにてもあ小訓れあ
西文大長乃西平をともまに彼あの源氏に
てま一はせの光源氏と假名一とありとありゆり

貝倉下



うた世のさぬを心に感ずる事には作り作りを西
文大匠の四年死にありて後田融院乃天福之
年四月にゆりされて都にゆりのかり式納にあり
玉多し一尺乃杜貝を我方小ぬ先を此片の
北貝に赤やい合せておにいし玉一河乃末の
遠のさるゆと倍りおくまらこいあまをそはま
糸の女房を安侍くた典あつゆにありし源氏
物語まこり姿を蛤の中は信がた貝合乃た
しじれをちせしより始り作りとるやけたしじれ世

小並に玉よ付て二十六種の款仙貝小倉ふは
乃色紙貝など友家より造出され作りを貝の
款の二百五十種あてを申款によするもの二百餘
種に及びたり但しこれの色々の貝とあつめあ
るもの名の付するものあれば蛤貝一種にて
陸陽和合の貝合とらるとは久い矣なりて括
いられども貝合乃名は日トを扱を別をま
しうんとそつづれ乃作りを貝合といふ紙改え
作りて貝合とこま作りを建款にま本

貝合下

集りぬるよせり

今ぞ一の浦の海をめぐり

貝合とてせよをりり

万葉集に筑波の島のいせれ貝いらふと
も貝蓋のりりとりあはしくもの島の
麻嶋のりり人に麻嶋神社はくもの神とも
やまの又佐吉の浦の貝いらふと
りりて貝蓋のりりあはしくもの島のりり
二の浦のりり海をめぐりてはれば

あれどけ浦の蛤貝を貝蓋のりり用ゆり
ふり由縁も作りしりり中
て心まの陰林にてしりり
しりりせばかの島の名もあまのりり
も男女いせり表候に
け国の二の浦の蛤を貝蓋のりり物
へしりり蛤のりり
一ツ乃牙よ一ツの蓋あり陰貝のりり
に之乃りりあはりて相あはる男女のまに遠り

貝合下

夫婦和合り道ありけり物ゆへ嫁つては夫
桶を身一の調度とする也されば屋人より道と
婿を夫婦にさすのみ侍れぬ男女いせれ
いやじ世に大切ありものあり一若しかりは
あり父とかり子とかり兄弟とかり朋友とかり
甲の偏も夫婦の中より出ある去されはゆ
うせにとんこ小瓶に志うれども男女いせり
きた中にさ多くは和らるる女方に流れさ
らる方小瓶にさ多くは和らるる女方に流れさ

は道ありけりて夫婦はもまじきなりい人別
ありと戒先ありと女子は難波りはあはれ付
てやこのはの貝れくきりくいと閉て云葉とと
くもよとん一何多さのふとくはしとやんい
侍らとや院に人乃侍へ嫁しては父の心にさ
がい習姑に若く不仕人奉侍人乃職也
そが一世のあり糸の男にまはるるさうな人
は片の男貝をいさし一はり女貝をいさし
男貝千万をあらん念さんともいさし

貝谷下



よに帰る方をよへるる湯の義也出貝桶帰
の方を下へる事陰乃義なりとこそまじりけ故
実のそき水とちりばしらんとも礼家乃儀を安
傳へしき固にちりて安小筆公を免侍りぬ
欽かきこり純

今の世に女子のりりておど奇なりと乃娘公房
孫のりに清和天皇の御孫の依中將も原業平
清使として侍勢圓へ下向の時帖子に親王命

美に飾りかき一はと人志れど知らざりて
の心ざしも清くはとせどもめてまじり
にわら孫が明日の尾張國へ紙をんたれ
小はざれ命乃心り人思ひ行てまじり
中を強りいとぬがしめられ命もあぬ
をわうた事におりて今別侍るふいの
時をさかん事もさうりまじりせめて
るわざもゆへんあんとさういひて
かりあしあらが命もさする名跡と

貝桶下

せほしきなりとのむきと盛にきてあり

から人のけりたれどぬきぬきありあれ

とありたれば業平のあへど後松の枝をて
くまの炭にて下のをを虫はあたり

又あふ返りせられたん

けりけり伊勢物語にふくむるあまきよりななり
上下のををむきとけりけりけりけり
あまきよりけりぬ後松の炭にて下のをを
むきたあふ縁にけりけりけりけりけり

たふらふあり又是にぬよりけりけりけり
集に肉よむむけりけりけりけりけり
くまよむむむむむむむむむむむむむ
て女のけりけりけりけり

人をけりけりけりけり

よりのけりけりけり

あふむむむむむむむむむむ

あまきもや業平のあまきもぬよりけりけり
周にけりけりけりけりけりけりけり

見合下



にて友女のりてあきいふせしと也又後
りよりの侍らもとす揚々をすめをけりて名不
を縁がた奇のころごとくも人あき其於親
に引合せてたえ名不歟人重奇れよと合せ
を志す人さあにいしるのちり是ハ天磨帝
乃女侍を権殿の芳子とすハ小一条大長門尹
公の侍女にて海へせまれば心へありあつた非
志ふておとし海を時以又師尹とすハ中久
させあふ行に一よこもあつた人次いさん

此今を筆人にて深まさんとかやせぬ古今の
歎世をささううをせまんとて此字又いせさ
せあ人しるん教あして小をこれに古今集の奇
乃名不と縁がた別のれに名不の奇をさ
引合せて縁貝を引やうにあらん今集名古
乃使ししあつたある友家の書ふあつたあり
これ縁貝の始るんをさう又奇のれ幸名と奇
貝といふ奇のれと名付し一幸の百年あつた
乃るさり其ゆへ今乃のれといふ

貝合下

絶てきり以後陽成院を去る二年八月に紅毛
人始末記は未だある故紅毛人今の如くを
あり日本へ傳へたるよりその持来の貝と云々
しるしにしてしるし物にり傳りてより奇異續
しるしに記されたる人ももまことにたりの
のはより奇異なることとあるありし年持
此物と混じりたる也何事もあるにじうぞ
と清少納言がいへども美事なるものぞ
女子の奇異とも續松と云ふい級先まこと

縁としきり乃名のとをわたりて
天照大神の淨冠にも其物乃根を
んよりしを傳へ今のはがりを
人のとて屋人の教ありしは
きりしものもさうなる物なる
ものとしりして物事なり
事もあまたあり

下 終

寬延二年己二月吉日

江戸通本町三丁目

書林 西村源六

京都寺町五条橋詰

書林 額田正三郎

大坂心齋橋南詰

書林 松村九兵衛梓

